30周年記念号原稿

三題噺: SGML・コンテンツ・大学ランキング

SGML, Digital Contents and University Rankings: A Short Story with Three Topics

根岸正光

Masamitsu NEGISHI

国立情報学研究所

National Institute of Informatics

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2-1-2

E-mail: negishi@nii.ac.jp

情報知識学会創立30周年記念号への寄稿というので、改めて「情報知識学会誌」への筆者の論稿、記事の掲載履歴を調べてみたら、28件程あった(「研究報告会講演論文集」を含む。1993年の第1回年次大会から2003年の第11回大会まで、大会予稿集は学会誌とは別に「研究報告会講演論文集」として刊行され、その後「情報知識学会誌」の特集号に組み入れられて現在に至る)。論稿等の主題はいろいろだが、ここではSGML、コンテンツ、大学ランキングという三題噺仕立てで回顧を試みたい。

1 SGML

「情報知識学会誌」における筆者の論稿記事(共著を含む)28件中の最初のは、1997年の第1回SGML研修フォーラムの予稿「SGMLと電子文書の現況と将来」である(6巻2号、SGML研修フォーラム特別号)。我々は電子化文書の将来的普及進展に期待して、早くからSGMLに注目してきたところで、1990年の情報知識学会誌創刊号は凸版印刷の協力によりSGMLを用いて発刊された。これはわが国で初めてのSGML実用の試みであったと思う。

しかし、SGMLは、米軍用のマニュアルなどにおいて、頻繁な更新を確実に管理するための文書管理システムの一環として発

案されたもので、こうした特殊な利用環境向きと考えられ、一般への普及は進まなかったが、1995年頃から、電子化文書の方式として民間での関心が高まってきた。そこで1997年、情報知識学会では「SGML研修フォーラム」と題して第1回のセミナーを開催したところ、他に類似のものがなかったせいか、2日間で2万円という参加料だったが、関連企業から多数の参加者あり、これ以後数年間、このフォーラムは学会の「収益」事業となって学会財政の充実に貢献した。

折からWWWがSGMLの簡易版であるHTMLを採用したことや、より実用的なXMLが提案されたこともあり、第2回からは「SGML/XML

研修フォーラム」とし、参加費も2.8万円にしたが毎年大盛況であったのが思い出される。このフォーラムは2004年の第9回まで続いたが、さすがに賞味期限切れか追々不入りとなり、2005年の第10回からは、幅広いテーマを扱うべく「情報知識学フォーラム」と改名して、現在に至っているのである。

2 コンテンツ

筆者のこの業界での振り出しは、学術文献抄録データベースのためのオンライン検索システムの開発で、つまりデータベース屋である。文献抄録誌は戦前からあるが、その編集をコンピュータ化し、製品も印刷物ではなく、コンピュータ・ファイルの形で頒布する。これがデータベースである。その後、コンピュータの高性能化に合わせて、元々の論文誌自体の編集もコンピュータ化されるようになってきた。その製品は印刷版雑誌だけでなく、コンピュータ・ファイル版もできる。この種のものを、抄録データベースに対して全文データベースといった。上記のSGMLもこうした流れの上での話題である。

全文データベースが発展すれば、図書館では、印刷版の雑誌に代わって、コンピュータ版の方を導入して、次第に電子図書館になって行くであろう。1999年の第7回年次大会の筆者の演題は「デジタル・コンテンツ・サービスの動向と情報学」というので、デジタルだのコンテンツだのがはやり言葉になった当時の時勢が分かる。これからはデータではなく、コンテンツだというわけである。ほぼ10年後の2011年、年初の巻頭言を「電子書籍2年」（21巻1号）と題しているが、こうした趨勢は今に続いてい

るであろう。もっとも昨今は、ビッグ・データだの、データ・サイエンティストだのと、AIがらみで「データ」の復権もめざましいようなのが面白い。

3 大学ランキング

学術文献関連データベースでは、抄録や全文とは別に、ガーフィールドの発案にかかる引用索引データベースがある。これも当初の手作業編集の印刷版からデータベースへと進化したもので、現在の“Web of Science”に至る。その二次加工品で論文別の引用数統計を収めたデータベースを2000年に入手して、わが国の大学別の被引用度のランキングを計測した。何分本邦初の大学の研究力の客観評価なので、差し障りの向きから余計な真似をするなど難癖を付けられてはしゃくだから公表媒体を慎重に検討して、日本学術振興会発行の「学術月報」（53巻3号）に結果を掲載した。

折から、朝日新聞発行の「大学ランキング」誌がこれに注目して、ランキング結果採録の申し入れがあり、2001年発刊の同誌「2002年版」に寄稿した。以後「大学ランキング」誌からは毎年更新統計寄稿の申し入れがあり、データベースの版元、クラリベイト・アナリティクス社の協力を得て、毎年統計を出すようになり、今2018年4月刊行の「大学ランキング2019年版」まで、実に18年間にわたる連載でライフワーク風になっている。

情報知識学会には、引用統計以前にも、1997年から文献抄録データベースを用いた論文数の国別比較統計の調査結果を発表したが、2000年以降、引用統計関係の大会発表を行っている。この間、論文当たり

の平均引用数という単純統計から始めて、東大以外が上位進出するような「皆様に喜ばれる」指標の計算法の開発に心掛けて、2004年の国立大学法人化以降には、業績評価のための引用統計指標の提案などを年次大会で発表した（20巻2号他）。

国立大学の法人化以降、大学、研究機関の研究資金は、評価に基づく選択と集中という、苛烈な政策下におかれている。おかげで、その研究評価のためのビブリオメトリックスはいよいよ盛んになり、これは今や情報知識学会の重要な研究テーマになって、論文投稿も多いのはいかにも皮肉な感じではある。

4 間抜け落ち

以上3つのお題で、筆者が学術系コンテンツ関連の研究開発に関わっていたら、なりゆきで研究評価という大それた領域に足を踏み入れてしまった経緯をたどってみた。そこで、現下の形勢を見渡しつつ、情報知識学会の将来に思いを致して一言を労して、何とか落ちにつなげたい。

競争的資金による選択と集中を標榜する昨今の科学技術政策は、学術研究振興政策ではなく、経済成長のためのイノベーションを何としても必中で創出したいと懸命の経済政策、研究開発投資政策である。選択と集中はハイリスク・ハイリターン投資話と同様の無理筋で、圧倒的多数の落選者のみならずノーベル賞の先生までも批判しているが、もはや簡単には止められまい。してみると研究評価のビブリオメトリックスも情報知識学会の重要分野としてしばらく安泰であろう。はやりのAI技術の適用による的中率の向上が今後特に有望と思われる。

一方、競争的資金により若手研究者の非正規雇用が常態化して批判も強いが、政策的ににわかに止められまい。また少子化による大学の斜陽産業化も深刻だから、大学研究者は劣悪悲惨な職種とみなされて、若者のなり手が消え失せてゆくのではないか。これすなわちアカデミア全体の地盤沈下、液状化に他ならず、その一角にある学会の足元も危うくなりつつあると憂慮せざるを得ない。

という次第で、話が辛気臭くなって気の利いた落ちが付かず、この三題断はとんだ失敗作になってしまったが、高齢者の世迷い言とご容赦願おう。

謝辞

本稿をまとめるに当たって、学会HPの「刊行物アーカイブ」にはすっかりお世話になった。2008年の20周年記念事業では前学会誌編集委員長、国沢隆先生の努力により学会誌アーカイブのCD-ROMが配布された。これを引き継ぐ形で、芦野俊宏現委員長がオンラインのアーカイブを完成された。学会誌等が全巻揃い、カバーツーカバーで居ながらにして見られる電子図書館である。

以前、スキャン画像データはガサ張るので、データベースにはコード化データが必要で、また検索にはマークアップが必須などと思い込んでいたのが、まさに隔世の感である。

ここに、国沢、芦野両先生のこうした地道な学会への貢献に改めて敬意を表して結語とする次第である。